舎利信仰の形成と展開

末木 文美士（SUEKI Fumihiko）　国際日本文化研究センター教授

主な著書――

・『仏典をよむ　死からはじまる仏教史』（新潮社、2009 年）

・『鎌倉仏教展開論』（トランスビュー、2008 年）

・『他者／死者／私』（岩波書店、2007 年）

舎利信仰は、いうまでもなくもとはブッダの遺骨崇拝であるが、それが広範に広がるとともに、内容的にも多面的なものになり、宝珠とも習合して根源的な性格を持つにいたった。しかし、そのような舎利の根源性は、必ずしも後から付け加わったとばかりは言えず、もともとの舎利信仰に内在していたものではなかったか。そのような観点から、ここでは初期仏教における舎利信仰の形成と初期大乗仏教におけるその発展を見ることにしたい。

舎利信仰の起源となる話は阿含（ニカーヤ）の『大般涅槃経』（遊行経）に見出される。そこでは、ブッダを火葬した後に残された遺骨（舎利）を在家信者たちが奪い合い、結局、舎利を８つに分けて各地の仏塔（ストゥーパ）に祀ったことが記されている。しかし、その舎利・仏塔崇拝に対する経典の評価は曖昧であり、讃美しているように見えながらも、あくまでそれを在家者の任務に限定して、出家修行者に対しては修行に励むように勧めている。近年は、出家者の仏塔崇拝に対する関与を否定していないという解釈が強くなっているが、それにしても、それを積極的に勧めているようには見えない。やはり正統的な出家者の修行から見た場合、必ずしも中核に位置する活動とは考えられない。その舎利・仏塔崇拝は大乗仏教の興起とも深く関連しているが、大乗経典の中には舎利信仰を批判しているところも少なくない。

舎利信仰に対しては、このように肯定と否定の両方が見られ、在家者と出家者の問題も絡んで複雑である。そこで、舎利信仰の意味をもう少し深めて考えてみると、舎利は遺骨という有形で身体的・物質的なものであり、個別的でしかも死を媒介としている。それに対して、仏教の根本の真理は、そのような有形のものでは捉えられない精神的なもので、普遍的で死を超えた永遠性を持つものだという主張が、当然ありうる。舎利・仏塔信仰からより内在化した精神原理への転換は、大乗の『大般涅槃経』において仏塔崇拝から仏性論へと進むところに典型的に見られる。

しかし、それでは後者のみになればそれでよく、前者は後者に吸収されてしまうのかというと、それほど単純ではない。死を媒介とする身体性・物質性はそれほど簡単に消滅するものではなく、むしろ強力に残り、その力を発揮する。そのことは、『法華経』見宝塔品で、ブッダの真理性を証明するために出現した多宝如来が、死後の舎利の姿をとっていることにもうかがわれる。その多宝如来と一体化することで、ブッダは死と生をともに克服する寿量品の久遠実成のブッダとなることができる。

このように舎利信仰は、完全に精神化できない、死を媒介とする身体的・物質的な力が、普遍的な真理に結び付くところに特徴がある。そのような両面を具えるところに、舎利信仰の強さがあり、それが中国・日本の舎利信仰の多様化と根源化につながったと考えられる。